

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：邦人向け公開講演会『バリ島の芸能文化ー踊り，奏で，祈る日常』

日時：2017年2月4日（土）10：00～11：30

場所：国際交流基金ジャカルタ日本文化センター

参加者：43名（講演者含む）

内容

冒頭に、AA 研コタキナバル・リエゾンオフィス（KKLO）の拠点長を務める床呂郁哉所員から挨拶と趣旨説明があった。本講演会は KKLO のアウトリーチ活動の一端として KKLO に関係する研究者の研究活動の成果の一端を一般の（専門家以外の）方々に公開発信することを目的としており、ジャカルタでの開催は今回が初回となる。また同拠点長より、国際交流基金ジャカルタ日本文化センターおよびジャカルタ・ジャパン・クラブの全面的なご協力によって開催が可能となったことへ謝意が述べられた。続いて、AA 研の吉田による講演が行われた。要旨は以下の通り。講演後は、バリ島の芸能の歴史や宗教実践など、さまざまな点に関して活発な質疑応答が行われた。

【要旨】

『バリ島の芸能文化ー踊り，奏で，祈る日常』

吉田ゆか子（アジア・アフリカ言語文化研究所 助教）

インドネシアの中でも、ユニークな芸能文化を育むバリ島。そのバリ島では、芸能は人々を楽しませる余興であるだけでなく、祈りであり、また地域への奉仕活動でもある。本講演では、人々の社会生活や宗教と深く関わる芸能を紹介し、そこからみえるバリの世界観や、バリ社会の現在について考える機会とした。

バリ島での芸能上演では、時おり興味深い場面に出くわす。たとえば、観客が誰一人いない閑散としたなかで演者が宙をみて熱心に語りかけている仮面劇上演、逆に芸能が2つも3つも隣り合わせで同時に行われ混沌とした上演会場、人気役者から全くの初心者までが共演する演劇上演、参加しないと罰金を課せられる舞踊、など。これらのどこか不思議な芸能の姿は、じつは上演が、見世物であるだけでなく、ある種の儀礼でもあるという点に起因している。講演の前半では、バリ芸能を、人々と不可視の存在（神々や悪霊など）とのかかわり、という視点から読み解いていった。

講演の後半では、芸能の担い手たちに注目した。バリの芸能者のほとんどは、芸能で生計をたてるプロフェッショナルではなく、他の仕事に就いているいわゆるアマチュアである。バリ島で優れた芸をもつアマチュア芸能者が大量に育つのはなぜか、彼らにとって芸

能活動はどのような意味があるのだろうか。講演者本人がバリ島で芸能修行をしたさいの体験談も交えながら、これらの問いについて考えた。バリの芸能を担う者たちは、それで生活するに十分な現金を稼ぐわけではないため、彼らをその意味で「アマチュア」と便宜的に呼ぶことができる。しかし、彼らの芸能活動は神や地元コミュニティへの奉仕でもあり、その人の担う「仕事」でもある。講演では、それゆえに存在している、村落での芸能家を育む様々な活動、そして周囲の人々に様々に介入されながら芸能者が育つ様子を紹介した。